

Ⅱ. 臨床心理士からの支援

沖縄県立那覇病院臨床心理士 松岡素子

1. 子どもの発達を評価する

(1) 子どもの発達評価 — 知能検査 —

子どもの発達を正しく評価することは、とても大切なことです。なぜなら子どもに何が必要なのか、どのような援助をすればいいのかわかる手がかりとなるからです。病気や障害がある子どもたちこそ、あらゆる方法を駆使して、もっとも望ましい発達援助を考え続ける必要があります。

子どもたちの今を知る手がかりとしては、知能検査や発達検査、性格検査などがあります。知能検査は子どもたちの知的発達のレベルを測定する検査です。さまざまな検査が開発されていて、それぞれに特徴があります。

学校などで「用意、始め！」を合図に、クラス全員で知能検査をやらされた経験はありませんか。これは集団式知能検査といわれるものです。学校などの集団がどのような知能指数（IQ）の分布にあるのかわかるための検査なのです。したがって、本来は個人を評価するためのものではありませんので、この時の結果から「〇〇くんのIQは△△だ」ということはあまり意味がありません。時々それを誤解する先生や親がいたり、IQが高いということと学力が高いということが同じであると思いがちでいたりすることがありますので、注意しましょう。

もし、集団式知能検査でIQが極端に低かったり、発達に遅れがうかがえるような場合には、もっと詳しく測定できる個別式知能検査を用います。もっとも多く使われる検査には、田中ビネー式知能検査やWISC-Ⅲ知能検査というのが、あります。どちらも個別に、検査する人と一対一で行われますから、子どもの知的発達の状況について詳しく調べることができます。

しかし、どちらもことばで質問したり、手を使う作業などの検査項目があるので、視覚や聴覚、運動機能に障害がある場合や、言語障害がある場合には不向きです。そのようなときには、言語を媒介にしないで行うことができる大脳式知能検査や、コース立方体テストなどの知能検査を用いることもありますが、障害によってはIQを算出するという客観的判断ができないこともあります。

なにしろ知能検査は、子どもが積極的に参加することが前提となっていて、その上に時間制限があります。したがって、周囲の思惑をよそに、関心を示さない子どもや動作が緩慢な子どもは検査ができないか、できたとしてもあまり意味のない数値しか出てこないのです。

ここで知能検査は、子どもが表現できなければ、また表現しなければ測定できないという欠点を持っているということをしっかりと理解していなければなりません。IQを算出できないことと、知能が低いということは必ずしも同じではないのです。

知能検査は子どもが生きてきた年月の中で、どれくらい知識を吸収してきたか、またそうした経験を新しい試練に生かすことができるのかを測定することが中心です。したがって刺激の多い環境に育った子どもや、いろいろなものを見たり聞いたりする機会が多かった子どもは、検査をする人の言うことがよく理解できますし、いろいろなことを知識として知っています。当然のことながら、IQは高

く出る傾向にあります。その上競争しながら早くやり遂げることが好きだったり、何にでも興味を示す子どもはさらに高く出やすくなります。

ところが、のんびりしたところで育ったり、障害があつて外出の機会が少ない子どもや、入院生活が長くて年齢相応の社会経験が不足しがちな子どもは、たとえ潜在的な能力があつたとしても、知能検査の結果は芳しくないものです。それに、緊張しやすい子どもや人見知りをするような子どもは、検査に集中できないものですから、やっぱり低く出てしまうのです。

検査を受ける子どもの育った環境だけでなく、知能検査を受けた日の体調やきげんがよいとか、ぐずっているとかでも、検査値は影響を受けます。そういうわけで知能検査は、できるだけ子どもの力が発揮されるように配慮して行われます。病院では「十分に睡眠をとらせて、朝御飯を食べさせて、ちゃんとウンチも出させてから連れてきてください」と伝えるようにしています。そういうわけで子どもの疲労の少ない午前中に行われるのが原則です。いつもは昼寝をしている時間帯や、空腹だったり、疲れているようなときは検査すべきではありません。

また検査者の熟練度もかなり影響することが知られています。いずれにしても知能検査の結果は、ちょっとしたことで影響を受けやすいものであることをふまえて使用するべきものです。また心身の発達や、環境によって変動するものであることも心得ておく必要があります。

幼いときの結果にとらわれて、早々と子どもの将来を予測するような早とちりは避けなければなりません。発達のよい子がずっと同じ速度で伸び続けるわけでもなく、万事が奥手の子どもが急激に発達することもあります。また学力には、学習環境や子どもの興味や関心、集中力などが複合した結果としてあらわれるという側面があります。IQによって潜在的能力が確認されることがありますが、IQが低いことが必ずしも学力が低いことと同義ではないことを正しく理解しておく必要があります。

知能検査の結果は有用な資料を私たちに提供してくれます。どのような能力が伸びているのか、伸び悩んでいるのかを把握することによって、これから何をなすべきかを考えさせてくれるからです。知能検査を過大視せず、侮らず上手に利用することが大切です。

(2) 子どもの発達評価 - 発達検査 -

発達検査は、子どもの全般にわたる発達を客観的に評価する検査です。知能検査は知的発達に主眼をおいて検査を行いますが、発達検査は運動能力や社会性、情緒やことばの発達レベルにも注目して行われますから、全般的な成長のようすを客観的に知ることができます。また基本的な生活習慣がどの程度身に付いているかも調べることができますから、親が子どもの発達に応じて適切なしつけをしているかについても把握することができます。

代表的なものに、遠城寺式乳幼児発達検査や津守・稲毛式発達検査などがあります。これらはおおむね6歳頃までの発達を検査するためのものです。子どもを直接検査できなくても、子どもを観察することによって判定できます。したがって臨床では、幼すぎて知能検査ができない子ども、コミュニケーションがとりにくい子どもや障害があるために知能検査が適用できない子どもに対して用いることが多い検査です。

発達検査では、子どもの障害に起因する発達の遅れを知ることができます。また養育態度が片寄っていたり、不適切な対応をしているようすが明らかになることもあります。そのような場合、子どもの障害に合わせた育て方を助言しなければなりません。ときには障害があるために、できないと思いついでやらせていなかったり、かわいそうだからと必要以上に甘やかしているような場合があります。しかし子どもの発達や社会適応を考えますと、このような養育態度は大きな問題です。そのようなと

きに発達検査の結果は、適切な養育態度に修正するための目安になるのです。いずれにしても客観的評価は、子どもの発達を考える上で、さまざまな示唆を与えてくれると言えるでしょう。

心理検査は、検査マニュアルにしたがって実施するという前提では、誰が用いても客観的な結果が得られるようにつくられています。しかしながら知能検査などのように、検査法に精通している人が用いなければ正しい結果が出ない検査もあります。また検査結果を正しく読みとり、それを子どもの発達援助に生かすためには医学や心理学の知識と総合的判断力が要求されます。

検査結果を安易に解釈したり、検査の数値に振り回されたり、とらわれたりしてしまうと、弊害が生じることが多いのです。それがかえって子どもの発達を阻害することになったり、ときには子どもや親を長期にわたって傷つけることもあります。私はそのような事後処理をした経験も多々ありますが、知能検査や発達検査なども、毒にも薬にもなる性質を併せ持っていることを認識して、正しく利用しなければならないと知っていて欲しいと願っています。

～Q&A～

就学時の不安

Q. 就学の時期に、子どもの就学後の発達の可能性や学校への適応を評価し判断することは大切ですが、どのような点に気をつけて判断すべきでしょうか？

A. 小学校に入学する時期は、障害児を持つ親にとっては悩み迷うことが多いと思います。その際には以下の示すように、注意しなければならないことがあります。

(1)子どもの発達は流動的であり、成長とともに知的発達や情緒の発達に変化が生じます。

したがって子どもの発達状況に応じた対応が得られるのかを把握しておかねばなりません。できれば子どもの発達に合わせて、その都度適切な環境が提供されることが望ましいからです。一般的には、知的発達レベルが低く、周囲とコミュニケーションをとることが困難で、しかも周囲に関心が乏しい場合には個別的な配慮が行き届いた教育が必要です。しかし知的発達レベルが低くても、同年齢の友人への関心が高く、集団への適応が期待できる場合には、健常児との交流が大きな意味を持つことと思います。子どもが、学校での集団生活からの刺激を享受できる発達段階にあるか否かが、学校選択の一つの基準とも言えるでしょう。

(2)親が学校に何を期待するのかということで、学校の選択の基準はかわります。子どもの発達状況という要因も大切ですが、ときには親の子どもへの思いや教育方針を考慮することが、より重要であることがあります。親が障害を持つ子どもの将来に一定の構想を持ち、確固とした教育方針があるならば、またそれに伴う困難を受け止められるのならそれは尊重されるべきものです。学校は勉強を教えてもらうところであり、できるだけ知的刺激を多く受けさせたいと望む親がいます。また集団で生活することは学校でなければ経験できないと考え、学力や個別的配慮より集団活動を重視する親もいます。そのようなとき、主体的に育てたいという親としての思いを尊重することも、私たちの援助の一部ととらえることが必要です。客観的観点を見失わないように気を付けながら、さらに親の子育てへの思いにも配慮したいものです。

(3)学校側の受け入れ体制が整っているのかによっても、対応が異なります。医学的・心理学的判断や親の希望が一致しても、受け入れる側の物理的環境や人的環境が整っていないことは多いものです。そのようなとき、私たちもそれぞれの立場から環境整備を整えるべく働きかけなければなりません。しかしながら子どもを抱える親にとっては、そうした活動がかなりの負担になることもあります。さまざまな事情から現実的選択を迫られることも多いのです。そこでできるだけ支援をしたいものです。いずれにしても、子どもは親だけで育てるものでなく、社会もともに育てていくべき存在との観点に立ち、継続的に考えるべきことと言えるでしょう。

2. 子どもの発達を援助する

(1) 発達援助 – 発達とは何か –

子どもの発達を考えてみましょう。発達ということばを聞くと、多くは身体が大きくなるとか、ことばが話せるようになるといった“大きくなる”とか“……ができるようになる”ことを思いうかべるでしょう。

心理学の中に発達心理学という分野があります。この発達心理学は人間の発達を研究する学問なのですが、その対象は生まれてから死ぬまでの人間すべてです。それどころか最近は胎児も含めて研究されるようになりました。そうは言っても、人間はいつまでも大きくなったり、能力が伸び続けていくものではありません。身長伸びもそこそこで止まります。記憶したり計算したりする能力は20歳ぐらいがピークですし、運動能力も似たようなものです。発達どころか後退してしまったと感じる能力も加齢とともに多くなるものです。

ところが人間には、歳をとってもずっと発達し続ける能力があるのです。たくさんの経験を積み重ね、それを統合的に使いこなす能力です。言ってみれば経験に裏打ちされた知恵や熟練というものです。昔からこれは年長者の知恵や分別として尊重されてきました。これは“伸びる発達”に対して“増える発達”といえるかもしれません。つまり人間は生涯を通して発展的に変化し続け、知識や体験を蓄積していきます。そうした発達にこそ生きる意義がうかがえます。障害を持った子どもの発達も、同様の観点で考えていかなければなりません。

“できるようになる”といった伸びを期待する発達援助を行うことはもちろんですが、子どもたちの経験をたくさん増やして積み重ねていくことが、ほんとうはより大切な発達援助なのです。それは発達援助としての観点だけでなく、今を充実して生きることをも意味します。できないからとか、どうせわからないからと何もしない親に出会うことがあります。子どもは“できるようになる”ために生まれてきたのではなく、今を生きるために生まれてきたのです。豊かな日々を送ることが本来の発達の意味と言えるかもしれません。

子どもの身体と心の中に、多くの新しい体験と刺激を送り続けると、子どもがそれを抱えきれなくなって外に放出する 때가やってくる ことがあります。私たちはその時初めて、子どもの“増えた”発達を知ることができるのですが、それは見えないところでたまり続けていたということも理解するのです。子どもの親にも、発達について同じ認識をもってほしいのです。そのためにはたらきかけをすることも、大切な発達援助と言えるでしょう。

(2) 発達援助 – 親と子のよりよい関係をめざす –

子どもの望ましい発達を考えるにあたっては、親の育て方や親子関係に注目しなければなりません。子育てに迷ったり、戸惑うことは、たとえ子どもが健康に育っていたとしても日常的に起こります。ましてや障害がある場合には、それはもっと深刻な状況で表出することもあります。親には“増える発達”を期待して子どもに積極的に関わって欲しいと願っています。そこで親子が陥っている問題を客観的に把握して、親子をサポートすることが必要になってきます。

障害を持った子どもたちの親がとくに陥りやすい問題がいくつかあります。それは障害があるために子どもが“できない”ことを手助けしていくうちに、必要以上に手を出しすぎてしまうことです。

2. 子どもの発達を援助する

(1) 発達援助 – 発達とは何か –

子どもの発達を考えてみましょう。発達ということばを聞くと、多くは身体が大きくなるとか、ことばが話せるようになるといった“大きくなる”とか“……ができるようになる”ことを思いうかべるでしょう。

心理学の中に発達心理学という分野があります。この発達心理学は人間の発達を研究する学問なのですが、その対象は生まれてから死ぬまでの人間すべてです。それどころか最近は胎児も含めて研究されるようになりました。そうは言っても、人間はいつまでも大きくなったり、能力が伸び続けていくものではありません。身長伸びもそこそこで止まります。記憶したり計算したりする能力は20歳ぐらいがピークですし、運動能力も似たようなものです。発達どころか後退してしまったと感じる能力も加齢とともに多くなるものです。

ところが人間には、歳をとってもずっと発達し続ける能力があるのです。たくさんの経験を積み重ね、それを統合的に使いこなす能力です。言ってみれば経験に裏打ちされた知恵や熟練というものです。昔からこれは年長者の知恵や分別として尊重されてきました。これは“伸びる発達”に対して“増える発達”といえるかもしれません。つまり人間は生涯を通して発展的に変化し続け、知識や体験を蓄積していきます。そうした発達にこそ生きる意義がうかがえます。障害を持った子どもの発達も、同様の観点で考えていかなければなりません。

“できるようになる”といった伸びを期待する発達援助を行うことはもちろんですが、子どもたちの経験をたくさん増やして積み重ねていくことが、ほんとうはより大切な発達援助なのです。それは発達援助としての観点だけでなく、今を充実して生きることをも意味します。できないからとか、どうせわからないからと何もしない親に出会うことがあります。子どもは“できるようになる”ために生まれてきたのではなく、今を生きるために生まれてきたのです。豊かな日々を送ることが本来の発達の意味と言えるかもしれません。

子どもの身体と心の中に、多くの新しい体験と刺激を送り続けると、子どもがそれを抱えきれなくなって外に放出する 때가やってくる ことがあります。私たちはその時初めて、子どもの“増えた”発達を知ることができるのですが、それは見えないところでたまり続けていたということも理解するのです。子どもの親にも、発達について同じ認識をもってほしいのです。そのためにはたらきかけをすることも、大切な発達援助と言えるでしょう。

(2) 発達援助 – 親と子のよりよい関係をめざす –

子どもの望ましい発達を考えるにあたっては、親の育て方や親子関係に注目しなければなりません。子育てに迷ったり、戸惑うことは、たとえ子どもが健康に育っていたとしても日常的に起こります。ましてや障害がある場合には、それはもつと深刻な状況で表出することもあります。親には“増える発達”を期待して子どもに積極的に関わって欲しいと願っています。そこで親子が陥っている問題を客観的に把握して、親子をサポートすることが必要になってきます。

障害を持った子どもたちの親がとくに陥りやすい問題がいくつかあります。それは障害があるために子どもが“できない”ことを手助けしていくうちに、必要以上に手を出しすぎてしまうことです。

3. 介護する親を援助する - 介護する親のメンタルヘルス -

医療や福祉関係など、対人援助を仕事としている人にバーンアウト症候群（燃え尽き症候群）になる人が多いと言われていました。看護婦や福祉施設の職員など直接患者や障害者などに接する人が仕事をする活力を失って、ときにはうつ状態のようになってしまうことが知られるようになってきました。そうした人たちは、患者の回復を願って、また障害者の機能回復や社会復帰を目指して、誇りと熱意を持って仕事をしてきた人たちです。ところがいつも患者の病気が快方に向かうとは限らず、また期待したほどには芳しい成果が上がらないことに何度も直面しているのです。

そうしたときに真面目で責任感が強い人ほど、自らの無力感にさいなまれ、心理的に疲労して仕事へのやりがいまで見失ってしまうことがあります。ときには挫折感を強く感じて仕事が続けられないほどのこともあります。こうした状況をバーンアウト症候群とよび、近年その対応の必要性が叫ばれるようになってきました。

同じようなことは、障害を持つ子どもを育てる親にも、また家庭に介護しなければならない家族を抱えている人たちにも出現します。慢性的ストレス状態からうつのような症状があらわれたり、子供の世話ができなくなったりもします。ときには相手の心身に虐待を加えることが起きることがあります。落ち込みがひどかったり、問題が深刻な場合には専門的な治療が必要になります。そこで前もってその危険性を認識して対策をこうしておかなければなりません。

自らがそうした状況に陥らないようにするためには、介護するということは、達成感や満足がもともと得にくいことを初めから認識しておくことです。その上で自己評価の基準を相手の変化におかないようにします。つまり子どもの“伸びる発達”に自分の努力の成果を重ねようとすると、まだできないと報われない経験ばかりをくり返していると思ひ込んでしまいます。そうではなく、自らの日々のがんばりに十分に高い評価をあたえるべきなのです。

また子どもの“増える発達”にどれだけ関与したか、また子どもの“増える”は自分自身にとっても“増える”経験であり、それをともに楽しむ積極的な態度が望まれます。子どもの“増える”を楽しむことによって、心のエネルギーを蓄えることができます。自らの心のエネルギーを増やすことに熱心になることが、何より効果的なのです。

また子どもから離れて、自分のためだけに使う時間が確保できれば、気分転換や意欲の回復に大いに役立ちます。親が心の元気を回復するために、親自身が楽しめる活動にも取り組めるような、そんな幅広い援助も考えていきたいものです。

<メモ>